

第一〇三回日本学士院受賞者略歴

恩賜
日本学士院賞

受賞者

松浦

純



専攻学
生年
略歴

ドイツ語ドイツ文学

昭和二十四年 九月

昭和四十九年 三月

同 五一年 三月

同 五一年 四月

同 五五年 四月

同 五八年 四月

同 六〇年 四月

平成 元年一〇月

同 六年二月

同 七年 四月

同 一三年 四月

東京大学教養学部教養学科卒業

東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了

東京大学文学部助手

東京都立大学人文学部講師

東京都立大学人文学部助教授

東京大学文学部助教授

ドイツ・テュービンゲン大学後期中世・宗教改革研究所客員研究員（平成三年九月まで）

東京大学文学部教授

東京大学大学院人文社会系研究科教授（現在に至る）

ドイツ・ミュンヘン大学福音主義神学部客員研究員（平成一四年三月まで）

松浦 純氏の *Martin Luther: Erfurter*

Annotationen 1509–1510/11 (『マルティン

・ルター エルフルト期注記集 一五〇九—
一五二〇／一一』)に対する授賞審査要旨

松浦 純氏は、長年にわたりルターに関する研究を日独両国で発表してきたが、そのうち最初期資料に関する研究を、このたびテキスト校訂及び詳細な解説・注解を内容とする左記の大冊として公開した。

Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509–1510/11.

Herausgegeben von Jun Matsuura (Archiv zur Weimarer Ausgabe der Werke Martin Luthers 9), Köln/Weimar/Wien: Böhlau Verlag 2009.
CCLX+727pp.

ルターのテキストに関しては、生誕四〇〇年に当たる一八八三年、統一問もないドイツの国家的事業として刊行が開始され生誕五〇〇年の一九八三年に一応完結した「ワイマール版全集」が、現在使用される唯一の全集となっている。それ以後の新資料等を収載するため発刊された叢書が「ワイマール版全集アルヒーフ」であり、

全集の続編を成す。本書はその第九巻として刊行された。全集およびアルヒーフの諸巻は従来ドイツはじめドイツ語圏の研究者を主体として編纂されており、他地域しかも東洋の研究者による校訂・編纂自体、画期的なことと言える。

ルター最初期(エルフルト期)全自筆資料(行間・欄外注記)を編纂した本書の学術的意義として特筆すべきは、

第一に、(ルターが一五〇五—一一年に所属した)エルフルト旧アウグステイヌス会修道院の蔵書残部の組織的探索によって、松浦氏が一九八三年に自ら発見した新資料(イタリアのスコラ学者ボナヴェントゥラおよびイギリスのスコラ学者オッカムの神学書、イタリアの人文学者ジョルジョ・ヴァッラの百科全書的著作への書き込み)を刊行したことである。

第二に、同氏は、講義草稿・書簡など、続く一五一六年までの自筆資料をも現地調査し、文字の筆順の交替を確認して、従来一五一六年頃あるいは時期不詳とされていたアンセルムスへの注記がエルフルト期に属することを確定、また、その交替が既にエルフルト期に見られ、しかもインクの相違と一致することを指摘し、さらに引用や引照などの分析をも手がかりとして、エルフルト期全自筆資料の時期区分を可能にし、それに基づいて新校訂を行った。その結果、初期スコラ学者ロンバルドゥスによる神学教科書『命題集』第三巻

の信仰概念を扱う部分への注記が、当時担当した命題集講義の開始前後、第二巻講義中、第三巻講義準備時、と三次に亘っており、のちに宗教改革神学の中心となるこの概念について、既に他の箇所にも見えない強い関心が看取されることなどが、明らかにされた。

第三に、全集所収の旧校訂版（一八九三）が原則的にルターの注記のみを収録し、対象箇所に関しては一九世紀の教父全集に基づく簡単な指示に限っていたのに対し、本書は、対象テキストとの関連は注記テキストの構成要素である、との基本的立場に基づき、注記の対象である本文の範囲を逐一厳密に推定し、その正確な翻刻を収録した。また、旧校訂版では顧慮されていなかった下線、傍線なども、それがルターによるものであるか否かの慎重な分析を経て、文脈とともに収録し、ルターの読み手としての関心を示す、これまで知られていなかった豊富な記録を刊行した。

第四に、書き込みの相当部分を占める、アウグステイヌスなど教父の諸著作や中世神学書などの引用、参照指示、印刷本文にある引用指示の厳密化（多くは章の指示の付加）などに関し、本書は、注釈に際して、現行の校訂版のみならず原則的に活版印刷開始以来一五一一年までの全刊本ならびに当時のエルフルト大学図書館蔵写本残部を照合し、ルターの注記との一致と相違を記す。参照した刊本は約七〇〇に上り、参看のため訪れた図書館等も、欧州七カ国、四

〇ほどの機関に及ぶ。緒論で総合的分析が提示されるこの膨大な作業によって、引用や参照指示等の実際の典拠、ひいては当時の若き修道士・新任神学講師ルターの読書・知識の範囲が初めて具体的に解明された。

これと関連して第五に、本書はオッカムをはじめとするテキストの印刷本文に対してルターが行なった本文訂正を同様の手続きで分析した（特にオッカムへの一二〇ほどに及ぶ大量の本文訂正に関しては、刊本のみならず当該著作の現存全写本をも照合している）。従来聖書以外のテキストに関してのルターの本文批判についてはほとんど知られておらず、その発見と詳細な分析は、テキストに対するルターの当初からの厳密な学問的姿勢を明らかにするとともに、同時代の人文主義との関係についても新たなアプローチを可能とした。

最後に、『命題集』への注記には、ルターが参照したことが確認されるボナヴェントゥラ、ドゥンス・スコトゥス、オッカム、ピエール・ダイイ、ガブリエル・ビールによる注解の該当部分も適宜、註として収録し、ルターの注記の歴史的脈が示された。また、書き込みが遺された諸巻が辿った道程、すなわち主に修道院の宗教改革以後の起伏に富む歴史も、研究文献渉猟の上、ドイツ数都市の文書史料館での調査により原資料に基づいて再構成されている。

最初期自筆資料とその背景の発掘と解明を飛躍的に進展させ、ルター研究とりわけ思想生成研究の基礎を築き直した本書は、他者の著作への注記、引用、参照指示、本文訂正等の書き込みという特殊なテクストが秘める内実を最大限引き出すべく実践された「徹底して歴史に即した文献学」（序文）の成果であり、わが国のみならず欧米（ドイツ、オランダ、イギリス、アメリカ）の専門誌の書評（計五カ国九篇）でも例外なく最上級の評価を受けている。本書は日本学士院賞授賞に値するものである。